

01
—
研究

座談会：プレミアムレクチャー

次代を創る 共同研究の 土壌

名古屋大学大学院医学系研究科は、
2017年、若手研究者主催によるプレミアムレクチャーを開始しました。
同研究科内の優れた研究成果を発表し、活発に議論を交わすとともに、
研究者同士の情報交流を図る会として、年6回のペースで開催されています。
若手研究者の有志からなり、企画・運営を担う実行委員会の皆さんに
交流の意義や共同研究の展望について、語り合っていました。



Premium Lecture 実行委員会

佐藤 好隆 助教
SATO, Yoshitaka

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。医学博士。同大学医学部附属病院研修医などを経て、現在、名古屋大学大学院医学系研究科助教。専門分野はウイルス学。

井口 洋平 助教
IGUCHI, Yohpei

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。医学博士。同大学医学部附属病院医員などを経て、現在、名古屋大学医学部附属病院助教。専門分野は神経内科学。

新城 恵子 助教
SHINJO, Keiko

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程満了。医学博士。愛知県がんセンター研究員などを経て、現在、名古屋大学大学院医学系研究科助教。専門分野は腫瘍生物学。

濱口 知成 助教
HAMAGUCHI, Tomonari

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程満了。医学博士。大垣市民病院医師などを経て、現在、名古屋大学大学院医学系研究科助教。専門分野は神経遺伝情報学。

座談会：プレミアムレクチャー「次代を創る共同研究の土壌」

01
—
研究



井口 洋平 助教

佐藤 好隆 助教

新城 恵子 助教

濱口 知成 助教

“世界を視野に
若手の共同研究を加速させ
研究力のさらなる向上を目指す。”

学内の研究最前線を知り
研究者間のネットワークを形成

——本レクチャーの概要や魅力について
教えてください。

濱口 | 本レクチャーの特色は、演者はすべて本学の研究者で、中でも研究を主導している若手研究者が登壇する点にあります。

その演者にとっては自分の研究を発信でき、参加者にとっては学内の研究動向をタイムリーに知ることができる、またとない機会になっています。

佐藤 | 本研究科からは多くの研究成果が発表されていますが、准教授以下の若手や中堅の研究者が情報交換する機会は限られていました。身近にいる優れた若手研究

者から、どういう研究をしているかを直接聞く場を設けられたことは素晴らしいと思います。

井口 | 限られた研究資源の中で、より効果的に研究を推進するには、他分野の研究者との協力が欠かせません。それには学内の研究の最前線を知ることが第一歩と、実行委員会は直近1、2年で優れた論文を発表されている研究者のリストアップから始め

ました。本レクチャーの最大の目的は、本学の研究力向上にあると言えるでしょうね。

新城 | 今は研究開発の効率化を図るため、世界的にも共同研究が重視されています。本レクチャーは、学内のネットワークを広げるチャンスにもなっているのではないのでしょうか。

佐藤 | 学内の研究者だけで行われる点にもメリットを感じています。演者が成果に至るまでの努力、発想に至ったきっかけなど、研究の裏話についてお話しくださることも多く、参考になることばかりです。時に200人程の参加者を集め、好評を博しています。

新城 | 専門が異なる多様な分野の研究者が集まり、大学院生も聴講の対象にしているため、演者の方に各分野の基礎から解説いただけるのも特長です。違う分野の最先端の研究を基礎から学ぶことができるのも、学内ならではのと思います。

異分野の技術や手法が
自身の研究の発展につながる

——ご自身の研究に本レクチャーはどんな影響を与えていますか。

佐藤 | 研究者個人としても本レクチャーは刺激的です。私の専門はウイルス学ですが、異なる性質の細胞が隣り合った際に起こる現象についても興味を持って研究しています。ウイルスに感染した細胞の周

とだと思っています。私自身はRNAとパーキンソン病に関する研究に取り組んでいますが、研究を効率化するスクリーニングの手法や研究の展開方法など演者の発表がとても参考になりました。



りを正常な細胞が囲んでいる状況はがんと似ており、異分野の研究者の発表を聞きながら、何か一緒にできそうなことはないかと毎回、情報を収集しています。

新城 | 私はがんの新しい診断法の開発について研究を進めており、がんから血液中に流れ出たDNAの解析のために、次世代

シーケンサーを使いたいと考えていたんです。そんなとき本レクチャーで登壇された演者の方がその技術に詳しいことを知り、相談した結果、共同研究を始めることになりました。検出の条件や方法など実験のコツについてアドバイスいただき、非常に助かっています。

濱口 | 確かに、実験技術の理解には経験の積み重ねが必要な場合もあり、対面でないコツが伝わらないこともあります。学内の研究者同士であれば、気軽に技術の交換がしやすく、互いの技術を高め合うこともできるので、学内で共同研究を進めるのはとても良いこ

井口 | 私は神経内科の臨床医として神経変性疾患、主に筋萎縮性側索硬化症の研究をしています。まだ直接的に本レクチャーと自身の研究が結びついているわけではありませんが、幅広い分野の研究を理解し基礎知識を増やすことで、専門分野の発展につなげていきたいと思っています。

新城 | そうですね。私の研究テーマは脳腫瘍なのですが、将来の脳腫瘍の治療を見据えると、脳内の正常の神経細胞の重要性を知っておく必要があり、本レクチャーを通じて神経に関する知識を深められることに意義を感じています。

交流の中で生まれる共感が
次へのモチベーションに

——交流の意義や課題についてお考えをお聞かせください。

井口 | 皆さんがおっしゃるように、本レクチャーを機に研究の技術や機器、経験など互いの不足部分を補い合えれば、共同研究も広がっていくはずです。また、演者は同

世代の研究者も多いので、モチベーションが一段と高まる参加者も多いでしょう。私自身も本レクチャーで発表できるような研究をしなければ、と意欲がわいてきます。

佐藤 | そうですね、研究者はそれぞれ次の展望を持っており、実現のきっかけを提供することが本レクチャーの役割です。今後実行委員会としては、卓越した研究成果や共同研究の核となる技術を持っている研究者を演者として選んでいきたいと思っています。

濱口 | 学外の研究者にはなかなか聞けない質問にも、演者の方々は丁寧に答えてくださり、毎回、意見交換も活発です。技術に精通した研究者でも成果に至るまでの道のりは遠かったなど、学会発表では語られない苦労話には共感できる部分も多く、価値があります。

新城 | 講演後の懇親会では演者の方とざくばらんに話ができ、大学院生も交えて参加者同士の交流も楽しめます。同じような立場で皆さん頑張っていることがわかり、私自身とても励みになっています。

井口 | ただ、臨床分野の研究者の参加が少ないのが課題です。臨床と直結した研究発表ではない場合が多いので、診療で忙しい中、どうやって興味を喚起し足を運んでいただくか、もっと検討していかなければな

りません。

濱口 | 現在、演者の研究分野は、神経やがんのほか、幹細胞、遺伝性疾患などいろいろな分野に広がりつつあります。ぜひとも臨床の先生方に参加いただいて、アクティブに意見交換ができればと願っています。

佐藤 | この課題解決に向けて臨床分野から女性メンバー2人が実行委員会に加わり、体制が強化されました。基礎と臨床、男女の比率も半々となり、会の内容・運営の充実が図っているのではないかと考えています。

共同研究を次々と生み出す
意欲的な研究風土を醸成したい

——本レクチャーが描く将来の展望を教えてください。

新城 | 今、医学部出身の研究者が減少していますが、実行委員会のこのメンバーはすべて医学部出身の研究者です。今後は、本レクチャーを通じて大学院生だけではなく、学部生にも医学研究の重要性を伝えたいですね。特に女性研究者が少ないので、こういう道もあるのだと発信して仲間を増やしたいと

願っています。

濱口 | 研究者同士の交流を皮切りに、共同研究が実際に始まる場を提供することが本レクチャーの目標です。また、共同研究を目的としなくても、気軽に意見交換をして、多くの研究者から示唆や提案を得られる身近な場として発展させていくことも必要でしょう。

佐藤 | 研究者同士の新しい交流が生まれると、自ずとキャンパスの雰囲気も活気に満ちてくるのではないのでしょうか。意欲的な研究風土が醸成されるのではないかと期待しています。

井口 | 北米は研究室間の垣根が低く、どの研究室の機器も自由に使えるほど開放的な研究環境が広がっています。その点、日本はまだまだ交流が少ないのが現状ですが、本レクチャーが研究室間の垣根を低くすることに貢献できるはずです。今後もレクチャーの内容を充実させ、共同研究や研究力向上につなげていきたいと思っています。

